



北海道遺産・北見市指定文化財

ピアソン記念館

第89号

2019.12.12

ピアソン便り

発行人：吉田 邦子（理事長） 編集人：伊藤 悟（理事）

NPO 法人ピアソン会事務局

(事務局 長 伊藤 悟)

〒090-0036

北見市幸町7丁目4番28号

Tel. FAX 0157-31-1215

ピアソン記念館内

午前 9:30 ~ 午後 4:30

e-mail アドレス

pierson@yacht.ocn.ne.jp

姉妹都市エリザベス市を訪ねて

「ピアソン夫妻は姉妹都市交流の原点！」

ピアソン会ハーブ部会長

公式訪問団 長南 幸子

北見市・エリザベス市姉妹都市

提携50周年。友好の種をまいた

町へ」⑩「日本で過ごした40年間
の幸せな日々」⑪「キリストの十
字架」⑫「日本の伝道者掲載論文

のが「宣教師ピアソン夫妻」であり、今からさかのぼること105年前になります。15年間の野付牛・北見滞在中に、夫妻が遺した著書著作をピアソン会では大切に保存管理してきました。その一部を翻訳整理して電子書籍化したDVDとピアソン夫妻の足跡を記した銘板プレートを用意し、今回の私のお届けするものが、今回の私の最重要任務となりました。

前段、この図書館に大きく関わったアンドリュウ・カーネギー氏（カーネギー財団創設者）やエリザベス市命名の由来エリザベス・カートレット夫人（初代ニュージャージー州領主）の歴史など収蔵品の説明をいただきながら館内を一巡り。

エリザベス市図書館は正面玄関に「FREE PUBLIC LIBRARY」を掲げ、市民に知る権利を保障する開かれた市民の図書館という落ち着いた感じのある建物です。入口で最初に目を引いたのが、「エリザベス公共図書館は、姉妹都市である北見からのゲストを歓迎します」というメッセージカード。さらにその下のショウケースには、日本の書籍紹介と過去数次にわたる北見市からの訪問団の写真や寄贈品が並べられており、図書館の皆様の温かい歓迎のお心遣いがとても嬉しく感じました。

そして、案内されたエリザベス市地方史室において、メアリー・フェイス図書館長に、ピアソン会からの寄贈品として無事、手交することができました。



電子書籍の内容は、
①「昔話」1801年
②「北海道における精霊の活動」③「日本・北海道・明治41年」④「だんだん」⑤「六月の北見路」⑥「尋ねよ・されば神は与えたもう」⑦「アイダ・ゲップ・ピアソン」⑧「日本農村伝道」⑨「いざ行かん次なる集」。これら12編の著作がDVDに収められています。

エリザベス市ではピアソン夫妻の存在は知られていても、人物像

やその働きについて記されたデータは少ないと聞いています。今回の電子書籍寄贈によって、これから10年20年と、エリザベス市の若者たち・市民に読み継がれ、広く愛される図書として、両市の共有財産となりますようお願いするにはいられません。ピアソン会では、この電子書籍の存在を市民に知っていただくために、夫妻を紹介する銘板プレートも作成しました。私は図書館長に「ぜひ図書館1階の受付近くに飾って、たくさんの方が見えていただけますように」をお願いしてきました。一方、図書館長にはスペシャルプレゼントを用意しました。ピアソン会・ハーブ部会手づくりの和装小紋の生地を使った「匂い袋・サシエ」。館長は「きれいな袋は「きれいな」と、とても喜んでくださいました。

その日の午後は、ピアソン夫妻のお墓参りにローズデール墓地へ。感

謝の祈りを捧げました。おふたりの眠る墓所の周りには、ご親族と思われる多くのピアソンの墓石があること。また、そのすぐ近くには、明治学院創立者へボン氏のお墓とともに、明治学院が建立した墓碑銘が日本語で記されていました。さらにへボン氏の隣には、30歳で召された日本人牧師「REV. OKUNO TAISUNOSUKE」のお墓もあり、百年近く前の宣教師たちの様子が偲ばれました。知られざる歴史です。

こんにちまで関わってきた多くの先人の思いを受け継いで、北見市とエリザベス市の平和と友好の歴史をさらに積み上げていくことを、50年の節目の年にお誓います。



写真右／ピアソン夫妻のお墓にお花を手向けて来ました。

園児たちの手作りオーナメントで

クリスマスツリーを飾る！

写真左／オーナメント作りに夢中になる園児たち。(11月8日撮影)



写真左／自分たちで作ったオーナメントを一生懸命飾り付ける園児たち。(12月3日撮影)



今年も、幼稚園児による手作りのクリスマスツリーの設置が12月3日に行われました。

北見幼稚園の園児22名が作ったオーナメントが、高さ2メートル40センチのウラジロモミの木(武田花光園協力)の枝に次々と飾られました。自分の作ったものがより見える場所にと、かなり苦労している様子でした。最後にに雪になる綿をソツと枝の上に乗せ、満足そうに笑みを浮かべている園児が、とても可愛く感じられるひと時でした。飾り付けが終わると、全員でクリスマスソングを歌い、最後にツリーの前で記念の写真を撮りました。百年前のピアソン邸で、クリスマス会が行われた記

念の写真が残されていますが、当時の子供たちはどのような思いでツリーを見ていたのでしょうか？写真左／記念写真を撮影する園児。



新春の恒例行事、親睦を図いましょう！

新年会～2020年を語る懇親会～

- ◎ 開催日時 : 2020年1月7日(火)午後5時15分～7時15分
- ◎ 開催場所 : オホーツクビール 北見市山下町2丁目2番2号
- ◎ 申し込み : 2019年12月18日までピアソン会事務局まで
- ◎ 参加費用 : 3,500円(不足分はピアソン会で負担いたします)
- ◎ 問い合わせ : NPO法人ピアソン会(電話0157-31-1215)

瞳のことなら、よっしーへ!!

お洒落なめがね、機能的なめがね、お気軽に入りが見わかります。サングラス、アイファッション用品、めがねの修理も承っています。

瞳ふあつしよん・瞳けあ
めがねのよっしー

〒090-0043
北見市北三条西3丁目
TEL:0157-57-3664
定休日/毎週木曜日
営業時間/10:00～19:00

ピアソン
ピエソナルビル
● ナップス様
緑野の小山様

三塚店
二塚店
一塚店
パルクビル

「ニュージージーランドからの便り」第19回



写真上／ニュージージーランドのワンガヌイ

ピアノソング顧問 グラハム・ハード氏

2019・9・11

◆ワンガヌイで。今日の午後、果樹の周りの草取りをしました。木に残る花々をめぐりミツバチが飛んでいます。

2019・10・2

◆札幌の「ドナルド・キーンについてのフォーラム」に参加できず本当に残念です。対談集「ドナルド・キーンと瀬戸内寂聴」楽しく読んでいます。キーンさんは、日本ではテレビや新聞記事などで知られていますが、外国では、彼の名声を確立した傑出した学識や優れた翻訳によってよく知られています。彼の英語の作品を読み返してみましたが、記憶にある通りの素晴らしさでした。二人（キーン・瀬戸内）が、三島由紀夫の才能を評価している述懐は興味深く、三島の他の作品も読んでみたい気がしてきました。

◆最近では英国の小説家イヴリン・ウォーを読んでいます。人間性や見解には賛同しかねても、ある種面白い作家だと思えます。

◆堆肥が効いた土に植えた2種類のジャガイモは、クリスマスの新

芋になるでしょう。

2019・11・5

◆昨夜無事に千歳空港に着き、友人宅にいます。天候は素晴らしく、北海道へ戻れて嬉しいですね。

◆11月14日のホテル黒部での夕食会、ご招待感謝です。折もよくお会いするのが楽しみです。

2019・11・12

◆昨日午後、快適な列車で北見に着きました。今は（北海学園）北見大学を訪問中です。

2019・11・16

◆ピアノソングの皆さま、黒部ホテルではとても楽しい集いでした。北見の友人方と心む機会を共に出来て素晴らしかったです。いつものように食べ物美味しく、あのお酒は本当に美味でした。

◆昨日は美幌峠や屈斜路湖、オホーツク海あたりをドライブしました。風は強くても晴れていて景色は美しかったです。みなさん、暖かくしてお元気でありますように。

2019・11・18

◆北見からの列車旅、車窓から雪景色を楽しみ、札幌に着きました。北見よりは暖かいです。◆北見の特別な寒さの中でのお見送り、様々なおもてなしに感謝いたします。

寒さが続きますからお大事にお過ごしくださいますように。

今年6月に1年ぶりの北見訪問をされたハードさんから、「一年に一回というの間が空きすぎ、11月に再び北海道へ」(208既報)というメールが入り、「ハードさんはやっぱり北海道、特に北見が懐かしいんだね」とつながりのある人たちとニコニコしました。美幌峠での写真によく似た構図の一枚は、ニュージージーランドの故郷ワンガヌイでコテツジのウッドデッキから届きました。季節は正反対の南半球にあっても、30年近い滞在の北見が身近に感じられているようです。

グラハム・ハード顧問を迎えて

（2019・11・14（木）北見・ホテル黒部）

今年6月に1年ぶりの北見訪問をされたハードさんから、「一年に一回というの間が空きすぎ、11月に再び北海道へ」(208既報)というメールが入り、「ハードさんはやっぱり北海道、特に北見が懐かしいんだね」とつながりのある人たちとニコニコしました。美幌峠での写真によく似た構図の一枚は、ニュージージーランドの故郷ワンガヌイでコテツジのウッドデッキから届きました。季節は正反対の南半球にあっても、30年近い滞在の北見が身近に感じられているようです。



写真左／ハード顧問（左側中央）と談笑するピアノソングの会員たち。

クリスマスリース講習会終了！

今年で5回目となりましたクリスマスリース製作の講習会も無事終了いたしました。

定員20名の枠で募集いたしましたでしたが1組親子での参加がありましたので21名で実施されました。

今年、リースの素材の中に、ピアソンさんがこよなく愛した三柏の木の葉を使って見ました。また、庭で採れたくるみとイガ付き栗の実なども使用しました。柏の葉は縁起が良いそうです。



写真上／渡部恵子さんの作品。



写真上／根本千鶴子さんの作品。

さん、長南さん、中山さんが出席し、ハードさんの歓迎夕食会となりました。久々に食前酒が始まり、ハードさん好みの道産日本酒は、前回その美味しさを実感したそうで、食事も同様「そば弁当」。皆それぞれにホテルの名品を味わいつつ和やかに過ぎた2時間余りでした。

「ハードさんが日本に関心を持たれたのは『茶の本』（英語）を読まれてからだったそうですね」と話題も広がり、今も漢字の練習や尺八、書道も続けるハードさんの側面が語られました。「北海学園北見大学」が2006年札幌で「北海商科大学」として開学後もしばらく来北され、以前にも増してピアノソングの活動を支えてくださいました。

会食翌日15日、美幌峠、屈斜路湖、オホーツク海あたりをド）ドライブされました。

（吉田邦子／記）

写真右／親子でリース製作に挑戦。

ピアノン夫妻資料収集記 (9)

ピアノン会理事 玉置 義弘

ピアノン宣教師の父親のデビット・H・ピアノン (David Harrison Pierson 1818・5・8～1889・10・30) は牧師だったことが知られていましたが、今回は父親と母親についての調査結果を紹介したいと思います。

ピアノン宣教師の父親のデビット・H・ピアノン (David Harrison Pierson 1818・5・8～1889・10・30) は牧師だったことが知られていましたが、今回は父親と母親についての調査結果を紹介したいと思います。



写真右／伯母のマリア

1878年に発行された「Pierson Genealogical Record」というピアノン一族の系譜によれば、祖父はエリヤ・ピアノン (Elijah Pierson 1780～1862)、祖母はマーサ (Martha Williams Pierson 1785～1851) ということが解りましたが、職業は残念なことに記録されていません。祖父の生まれた場所はモントクレアかコールドウェルとなっており、現在のエリザベス市に近い場所です。

ピアノン宣教師の父親はコールドウェルで生まれた7人兄弟の6番目で、ルーザ (Luisa B. Pierson Dodd 1807～1894)、エリヤ (Elijah B. Pierson 1810～1876)、カルヴィン (Calvin D. Pierson 1811～1888)、マリア (Maria Pierson Crane 1813～1895)、カレブ (Caleb Nelson Pierson 1815～1866)、ネイサン (Nathan Williams Pierson 1821～1891) がピアノン宣教師にとっての叔父や伯母になります。父親のデビットは

とから、同居していた子供達は学校の寄宿生と思われず、このデビットの学校は退任後、ワイコフ牧師 (Joseph Wycokoff) が引き継ぎ、数年後に火災で消失したとあります。プリンスストン神学校の記念誌によれば1840年にニュージャージー大学 (現プリンスストン大学) 卒業。2年間教育に携わった後1842年にプリンスストン神学校に入学。1844年卒業。同年4月17日にエリザベス市長老派教会より牧師に任命と書かれています。第2長老派教会で奉仕した記録、パッセーグトリヨンファームズなどの教会で1857年から59年まで時々奉仕したとあるのが、牧師と同時に教育者としての仕事もしていました。1867年にニュージャージー大学から名誉博士号を贈られています。

父親のデビットについて、以前に調べた1850年のピアノン家の国勢調査表に32歳のデビットと妻のキャロライン、子供のヘンリーとマリー以外に10代の男の子が17人も同居していることを不思議に思っていました。1889年に発行されたエリザベス市を紹介する本が見つかり、それによればデビットは1842年にハルゼイ氏が亡くなった後、チルトンにあるハルゼイ氏の学校を1844年に引き継ぎ、1851年にパールコテージ・セミナリーという学校を建て、1869年6月に辞任するまで、校長を務めたとあります。このこ



写真上／John Taylor Halsey

ところで、デビットが引き継いだ学校を創立したハルゼイ氏とは、John Taylor Halsey (1798～1842) のことで、ピアノン宣教師が日本に持ってきて、今は明治学院大学

に保存されている「ギュツラフ記聖書」を父親のデビットに贈った人物です。ニューヨーク市で生まれ、オーバーンの神学校を卒業した長老派教会の牧師でした。エリザベス市に移りチルトンに学校を建て、その時、デビットとピンダリー (John Francis Pingry 1818～1894) が教師でした。ピンダリーはピアノン宣教師が卒業した名門ピンダリースクールを1861年に創立しています。(正しくは、前校長のジョン・ササン・タウンリーが南北戦争に参加したため、その学校をピンダリーが引き継いだのですが)。ピアノン宣教師の父親とピンダリーは同僚であり、ハルゼイの伝記にはハルゼイの死後、有能な助手二人が学校を引き継いだと書かれていますので、一時期は二人が学校を運営していたのでしよう。しかし、ピンダリーの伝記にはデビットの名前がでていず、デビットの伝記にもピンダリーの名前はでていませんが、両者とハルゼイの伝記からこのように考えています。

ピンダリーの先妻キャロリン・G・オークリーはハルゼイ牧師婦人の妹であることは知られていましたが、今回の私の調査で、ピアノン宣教師の母親キャロライン (Caroline Peck Pierson 1821.9.1～1902.7.16) の弟サイアス・ペック (Cyrus Peck 1829～1907) は

ハルゼイ牧師の娘マリー (Mary Pierson Halsey Peck 1826～1910) と結婚していることがわかりました。また母親のキャロラインは、1861年に開校したユニオン女学校の理事をしていました。両親共に教育に携わっていたので、ピアノン宣教師もその影響から大学卒業後、教師を数年間していたのかもしれない。ピアノン宣教師とハルゼイ牧師が親戚であることは、ちよつとした驚きでしたが、ピアノン宣教師の姉マリー (Mary Halsey Pierson 1849～1940) のミドルネームがハルゼイなので、デビットは彼を尊敬していたのでしよう。

編集後記

ピアノンの故郷エリザベス市 (北見と姉妹都市) への訪問団が無事任務を終え帰郷しました。ピアノン宣教師が日本でのような働きをしていたのか、より詳しく知っていたために、ピアノン夫妻の著した英文資料を電子書籍化してエリザベス市の図書館へ寄贈いたしました。クリスマススの時期になりました。今年もピアノン記念館内にツリーを飾りました。また、恒例となったリース講習会も終了しました。年毎に立派なリースの出来栄えとなっています。今年は希望者にご自身の作品をクリスマスカード化するサービスを実施いたしました。(理事兼事務局長) 伊藤 悟